杉並区

平成28年3月発行　第5号

在宅医療地域ケア会議通信

在宅医療と介護の今

今号の主な内容

○多職種と連携して「口腔ケア」を充実　―杉並区歯科医師会の細見洋泰会長に聞く …… 1面
○訪問診療には人手が必要　―特養の現場を見る
患者さん一人ひとりに合わせてケア　―歯科衛生士の関口さん …… 2面
○口腔ケアをテーマに意見交換　―西荻地域の第3回地域ケア会議
「顔の見える関係づくり」の第一歩　―杉並区医師会の甲田潔副会長に聞く …… 3面
○「あなたの在宅医療をお手伝いします!」　―区役所の在宅医療相談調整窓口 …… 4面

■ 多職種と連携して「口腔ケア」を充実 ― 杉並区歯科医師会の細見洋泰会長に聞く

今年度から始まった在宅医療地域ケア会議では、多職種が「顔の見える関係」をつくるためグループワーク方式で話し合いが行われています。その中に歯科医師の姿も見えます。在宅歯科診療がどういうものか、また地域包括ケアにどのように関わっているのか。今回は、杉並区歯科医師会の細見洋泰会長に伺いました。

―訪問歯科診療とはどういったものですか?

杉並区歯科医師会　細見洋泰会長

会長：通院の患者がさまざまな理由で通院できなくなったとき、かかりつけの歯科医が訪問して診療を行います。最近の在宅訪問では治療や義歯調整と併せ、誤嚥性肺炎を予防する「口腔ケア」（口内洗浄）や、食べること・飲み込むことをスムーズにして栄養をしっかり取れるようにする摂食嚥下指導を重視しています。

食事は生活の基本で、その人らしい生活を続けるためにも欠かせません。その環境を整える歯科は、地域包括ケアの推進に深く関わるものだと考えています。

―現在抱えている課題は何でしょうか。

会長：いろいろな課題がありますが、まず在宅では診療所と同じレベルの処置をすることが難しいことです。このため、健康な時に普段から虫歯や歯周病などをしっかり治療し、きちんと噛んで食べられるという口腔機能を維持しておくことの重要性を広く周知していくことが必要です。口腔ケアや摂食嚥下機能の指導は、ヘルパーやケアマネジャー等の多職種との連携が欠かせません。その意味でも歯科医師、歯科衛生士が「在宅医療地域ケア会議」に積極的に参加することが必要だと思います。

また、高齢化で訪問診療のニーズは増加しますが、それにきちんと応えられる歯科医師の技術レベルを保つことも課題です。しかし、多忙な歯科医が多く、訪問診療を行う歯科医は6割にとどまっているのが現状です。

―そうした課題に今後はどう対応されますか。

会長：現在、杉並区歯科医師会では区内を6ブロックに分け、各ブロックに「訪問診療協力医」を10人ほど配置しています。訪問診療の依頼受付は杉並保健所にある「歯科保健医療センター」で行い、センター常勤の訪問医が中心となり各ブロックの協力歯科医と調整しながら訪問診療を行っています。今後は口腔ケアをさらに充実させるべく歯科保健医療センター内に「口腔ケアステーション」を設立し、歯科衛生士を派遣するシステムを構築します。こうしたサービスを確実に提供できることを「杉並の強み」にしたいと思います。

訪問診療には人手が必要 ― 特養の現場を見る

細見先生は隔週1回、中野区にある特別養護老人ホーム「ベタニアホーム」を訪問し、義歯の調整を中心とした診療を行っています。知り合いの歯科衛生士から訪問を依頼されたのがきっかけで、以来この地域での訪問診療は25年間続いているそうです。今年1月下旬、その現場に同行してみました。

施設3階の談話室に入ると、車いすに乗った入居者8人が続々と集まってきました。いずれも女性で、「上の入れ歯が落ちてくる」「かみ合わせが悪い」「噛むと痛い」…と症状はいろいろ。

細見先生は一人ずつ順番に大声で話し掛けながら入れ歯の具合を診ます。最初の患者は94歳。車椅子を使ってはいますが、とても元気で若く見えます。この施設では80代はまだ“若手”だとか。赤い紙をカチカチと噛んでもらい、持参した器具を使って削ります。入れ歯を口内に戻し、問題がなければ終了。5分とかかりません。この女性は「何でも食べられます」と自慢げ。

その一方、入れ歯の痛みを訴え不機嫌な人、順番が待ちきれず何回もトイレに行こうとする人…といろいろで、診療所とは違う対処の難しさもあります。同行した歯科衛生士のほかに施設の専任看護師やスタッフが立ち会って補助します。細見先生は「こういう現場には人手が必要。一人では無理です。チームでやらないと」と話します。細見先生以外にもベテランの歯科衛生士が定期的に訪問して口腔ケアをしているといいます。チームが機能している現場を見ることができました。

患者さん一人ひとりに合わせてケア ― 歯科衛生士の関口さん

JR 阿佐谷駅から北へ徒歩で約2分。三宅歯科医院に勤務する歯科衛生士の関口智絵さんは、同歯科医院が2年前からスタートさせた訪問歯科診療チームに参加しています。歯科医師の川上洋一さんとチームを組み、患者さん宅を訪問し、主に口腔ケアをします。

関口智絵さん・川上洋一歯科医師

チームで訪問する患者さんは現在14人（口腔ケアだけは8人）。多いときは2週間に1回、少なくても月に1回は訪問します。訪問先では患者さんの歯の汚れを超音波振動で落としたり、歯茎の歯周ポケットを掃除・消毒したり、義歯の清掃をしたりします。ポータブルのエンジン（歯を削る機械）やバキュームなどを収めたケースを携帯します。

「歯を見てケアするというより、人を見てケアをします。患者さん一人ひとりに合わせることを心がけています」という関口さん。元気な人であれば診療所と同様の治療やクリーニングをするし、寝たきりで意識があまりない人であれば、誤嚥性肺炎の予防のためのクリーニングが中心になると言います。家族やヘルパー、ケアマネジャーの方々にも口内を清潔に保つことが、健康管理面でいかに大切かを説明するそうです。

「歯科医師と二人で行くと患者さんは話ができるのがうれしいのでしょうか、歓迎してくれます」。治療・ケアだけでなく世間話も大切な“仕事”のようです。処置をした後は「すっきりした～!」と喜んでくれるそうで、関口さんはその言葉を聞くとやりがいを感じます。

「今後はケアマネさんや医師、訪問看護師の方々との連携を進め、全員で患者さんを診ていくことが必要だと思います」と関口さん。訪問看護師の方から「最近、肺の機能が弱っている」など患者さんの情報を聞くと、肺炎予防を意識した処置を心がけたりするそうです。「患者さんの生活や健康についての情報を共有できるような仕組みがあるといい」と明かしました

口腔ケアをテーマに意見交換 ― 西荻地域の第3回地域ケア会議

1月から2月にかけて、今年度の最後となる第3回在宅医療地域ケア会議が各地域で開かれました。このうち西荻地区では「忘れてない?その原因はお口かも」と題して、口腔ケアの重要性を取り上げました。

誤嚥性肺炎を繰り返す高齢者にどのように関わればよいのか。意見交換は義歯の汚れの除去、虫歯の有無や治療の可能性から、口腔機能を保つ訓練についてまで広範に及びました。今回は言語聴覚士も参加して、「在宅医療＝多職種の関わり」が実感できた会議でした。

また、ケアマネジャーからは「歯科医師や歯科衛生士の訪問日に同席して、連携のコーディネートをしていきたい」と具体的な提案も出されました。

第３回西荻地域ケア会議の様子

「顔の見える関係づくり」の第一歩 ― 杉並区医師会の甲田潔副会長に聞く

杉並区医師会甲田副会長

平成 27 年度からスタートした在宅医療地域ケア会議。7地域でそれぞれ3回の会議を終え、2月22日の全体会で1年の活動を締めくくりました。リーダー医師の選任や医師会会員への周知等、この会議を支えてこられた杉並区医師会甲田潔副会長にこの一年を振り返っていただきました。

－医療と介護の関係者が垣根を意識しないで自由に情報交換できる態勢を作っていこうというのがこの会議のコンセプトであったと思いますが、一年を振り返っていかがでしたか。

甲田先生：関係者間で自由な情報交換ができる態勢は何よりも重要であると考えます。ただ、時間や場所を同じにすればその態勢ができるわけではありません。まずは、医療と介護関係者が顔の見える関係になることが第一歩です。今年度は各地域で在宅医療の問題点をもとに、忌憚のない意見交換ができたと思います。その点で「顔の見える関係」が築けたのではないでしょうか。

●現場の声の共有を

甲田先生：会議の出席者も現在は医療介護の関係者が主となっていますが、民生委員や町会の方などより多くの声が反映されると、地域包括ケアの構築に必要な観点をより鮮明に捉えることができると思います。

また、会議の方法等も各地域の工夫がありました。会議の企画運営にあたって、ぜひ他の地域を見学するなど、刺激しあってほしいですね。

●「杉並らしい在宅医療」を目指して

－この会議についての今後の抱負や課題をお聞かせください。

甲田先生：今後の課題のひとつは「杉並らしい在宅医療とは何か」です。「杉並らしさ」を具体化するのは難しいと思いますが、それぞれの職種が地域について考えていくことで、在宅療養生活を送る方にとっての『理想の在宅医療の姿』を描けるようになることが大事です。

第３回在宅医療地域ケア会議の開催状況（開催順）

地域名	開催日	テーマ
井草	1/18	本人と精神疾患がある家族への支援について
高円寺	1/18	認知症の方を介護する家族への支援
西荻	1/22	忘れてない?その原因はお口かも
阿佐谷	1/22	インスリン自己注射が必要だが、認知症のため実施困難な独居の高齢者に対する退院支援と在宅医療体制の構築
高井戸	1/27	高齢者の『服薬』
方南・和泉	2/3	認知症の方を支援するために
荻窪	2/4	在宅医療における服薬の問題点

「あなたの在宅医療をお手伝いします!」― 区役所の在宅医療相談調整窓口

「往診してくれるお医者さんが見つからない」「認知症はどこで診てもらえるの?」…高齢者はもちろん、障害者も含め、在宅医療に関する相談を受けているのが区役所2階にある「在宅医療相談調整窓口」。今回は保健師・ケアマネジャーの2人の相談員に、相談の現場について聞きました。

●在宅医療に関する情報の提供と相談調整

「どんな相談にも心を込めて対応します」と相談員

区民の方々が安心して在宅医療が続けられるよう相談内容に応じて、医療・介護の制度やサービス、医療機関に関する情報を提供します。さらに、必要に応じて入院・転院に関する調整もおこなっています。

例えば、病院から退院、転院を促されたが、どうすればよいのか。療養環境の変化に戸惑う本人や家族の相談を受けて、病院の説明をわかりやすく伝えたり、本人、家族の希望を病院側に伝えたり両者を取り持つこともあります。相談を受けるときは、単なる情報提供だけでなく、「相談者の方と一緒に課題を整理し、不安の種を取り除いていくよう心がけている」とのこと。

●ご本人の意向に寄り添って

例えば、リハビリテーション病院から退院を促されたが、本人は「もっとリハビリがしたい」と入院継続の意向が強く、対応に困ったケアマネジャーからの相談では、リハビリの概念を広く捉えることを提案しました。デイサービスの利用や接骨院のマッサージ、温泉治療など、具体的なリハビリ資源の紹介と、本人・家族が生活の中でできるリハビリを提案し、「本人と話し合う観点がつかめた」とケアマネジャーから喜ばれたとか。

また、夫のオムツサービスの利用相談にみえた女性から、「実は夫は末期がんであるが、もともとゴルフやお酒を楽しむ活動的な人、入院によりその楽しみを取り上げたくない」という妻の思いが相談から感じ取れました。そこで相談員は、訪問診療の医師・訪問看護・ヘルパー等、最後まで在宅生活を送るために必要な事柄を伝え、看取りのための環境整備を勧めました。

後日、その女性から「夫は最後まで思い通りに生き、納得のいく看取りができました」と、お礼の連絡をいただいたそうです。

相談員は「在宅医療は多くの職種が関わるもの、その方々と共に、本人はどうしたいのかという意向を汲み取るのが大事」と言います。

●漠然とした不安でも気軽に相談を

「『いま困っている』だけではなく、『これからどうしよう』が“相談どき”です。在宅医療に関する漠然とした不安や、『在宅医療はよく分からないけど、本当にできるのかな』といった段階でも、ぜひ気軽に相談してみてください」と相談員。相談は匿名でも受け付けています。

村田相談員（左）井野相談員（右）

★次号は平成28年6月発行予定です。

杉並区在宅医療相談調整窓口

高齢者等の在宅医療をサポートするため、相談員が区民の皆様や医療・介護・福祉の関係者の皆様からの在宅医療に関する様々な相談に応じます。

- 担当部署名：杉並区保健福祉部高齢者在宅支援課
- 電話連絡先：03-5307-0782（直通）
- 受付日時：月～金曜日（祝日・年末年始を除く）
  午前8時30分～午後5時

〈編集・発行〉杉並区保健福祉部高齢者在宅支援課　〒166-8570　杉並区阿佐谷南 1-15-1　電話：03-3312-2111（代表）　内線：3277